

秋元不死男論

オノマトペによる表白

うつきた
杉田良枝

言葉で何かを伝えようとするとき、意味に頼ることもあれば、感覚に重きを置くこともある。たとえば「笑い」を、大笑い、ほほえみ、にが笑い、嘲笑、失笑、冷笑と表現したとき、こうした言葉を読んだり聞いたりする人は、まずその意味を頭で理解してから、笑い方を思い浮かべるといふ少々まどろっこしい経路をとる。それに対して、笑い声そのものを描写したアハハ、イヒヒ、ウフフ、カンラカラカラ、ワッハッハという言葉からは、意味と状態が一瞬のうちに生き生きと伝わってくる。このように音声のもっている情感を感覚的にとらえて言葉にしたものが、擬声(音)語であり、笑うという言葉状態をニヤニヤ、ニンマリ、ヘラヘラなどと表現した言葉が擬態語である。二つは明確に分けられない部分があり、総称してオノマトペという。

オノマトペは、事物を感性によってとらえ、読み手の感覚とまっすぐに結びついて強烈な印象を与える。独特な感覚表現は、瞬時にして読み手に新しい世界を教えてくれる。たとえば芭蕉の「梅が香にのつと日の出る山路かな」は、日の出

のようすを「のつと」と捉えたところが斬新で、読者はかつて知らなかった朝日を見ることになる。川端茅舎の「ひらひらと月光降りぬ貝割菜」は、「ひらひら」によって類例のない月光を降らせた。また、萩原朔太郎の「のをあるとをあるやわあ」(遺伝「青猫」)という奇妙な擬声語は、犬の遠吠えを写實的に表現したものではなく、それに触発された作者独自の心象風景である。このように新しい世界を提示するオノマトペは、とくに短詩型の文学において強烈な力を発揮する。

一

秋元不死男の世界はオノマトペなしには語れない。

鳥わたるこきこきと罐切れば (昭21)

「氷海」終刊号で「不死男の二十句」を門下八名が選んだ結果、そのうちの六人がこの句を選んで最高点となり、不死男の代表作とされている。

この句の核心は「こきこきこき」というオノマトペにある。そもそもは罐を切る音の擬音だが、それだけにとどまらない。「コキ」という音のくり返し、動作の進行をあらわし、小刻みに罐切りを動かしている手とも見えてくるし、竿になり鉤になってジグザグと飛ぶ渡り鳥のようすも連想される。「鳥わたる」と「罐切れば」の結びつきにゆるぎがない。また、「ば」の働きのよって句末から句頭にもどる循環性が、音のくり返しによる動きによって更に強調され、大空の鳥と地上の人間とを繋ぐ、ひろびろとした世界を展開している。

自解によれば、「俳句事件で負った戦前の罪名は無くなり、つき纏うていた黒い影も消え」て「懸命に俳句を作り合った」終戦直後の作であり、「解放された明るさを噛みしめながら」「さわさわ」と渡ってきた鳥を見あげて罐詰を切ったという。句の背景には、作者の解放感と、鳥の渡りを「さわさわ」と爽やかにとらえる明るい心情がある。「コキコキコキトカンキレバ」という「カ」行音を主とした金属性のひびきは、解放された未来への羽ばたきをも象徴している。

しかし、この句はそのような作者の自解の範囲にはとどまらない。その起因は「こきこきこき」にある。鷹羽狩行氏は、「季節が来れば鳥はまた別のところに行けるが、人間は定住を余儀なくされる。その悲しみのように、『こきこきこき』は空しい音である」と鑑賞している。まさにそのとおりであるが、それだけではない。作者が「さわやか」と感じた

渡り鳥には、はるばると海を越えてくる苦しみがあり、ひたむきさもある。

また、罐を切るというせわしない動作は、鬱積したところの屈折表現とみることができよう。解放感に満たされている作者は、その奥にいわゆる「俳句事件」による獄の体験を抱えこんでいる。その苦しみを通り抜けているからこそ、深い解放感がある。「こきこきこき」は、ひたむきに生きてきた過去の苦さが思わず滲みだしたものである。オノマトペは、ときに、作者の語らざる本音をもあらわしてしまふ。作品は作者の手を離れてひとり歩きし、この句の言外の空しさは、当時の背景や作者の感慨をはなれてもなお十分に人の胸をうつ。

この句を最初に褒めた西東三鬼は、以来、不死男のことを「こきこき亭京三」と呼んだ。不死男は俳壇にデビューした当初、秋元地平線と名乗り、東京三の筆名も併用していた。この句は京三時代の作であり、戦後まもなく職業俳人となって不死男と改名した。その間、新俳句人連盟の結成と脱退、現代俳句協会設立への奔走などがあった。俳人として腰を据えた不死男にとっての転換期であり、オノマトペ開眼がひとつの俳句開眼となったに違いない。後に、寺山修司は「短歌研究」新人賞(昭29)の応募作に、「わが下宿に北へゆく雁今日見ゆるコキコキと罐詰切れば」という一首を交えていたが、不死男の句の模倣となることを案じてみずから抹消したという。不死男のオノマトペの衝撃力の強さを物語るも

月刊 春耕

主宰 皆川盤水

新入会員歓迎

誌代 (送料共)
1冊 900円
半年 5,400円
一年 10,800円

春耕俳句会

〒165 東京都中野区
中央2-49-15
電話03(3361)1798
振替東京1-139181

耳を澄まして生きていたのかがわかる。七十もの独房の鍵を鎖す音は閉塞感をより強め、「収容者の合図の器具でもあった」という水洗便所のもの悲しげな音は一人きりではないという奇妙な連帯感を抱かせ、囚徒の殴たれる音は神経を逆撫でした。驟雨と雨だれ、昨日と今日の汽笛の音などの微妙な音色を聞き分け、鉦の落ちたかすかな音に苦しい日々の経過を感じとる。音に対する神経がむきだしになっているのがわかる。終生消えない《瘡》を残した獄の体験は、また聴覚を研ぎ澄ました体験でもあった。

三

出獄してから戦中の空白期間を経て、句作を再開した終戦直後に詠まれたのが、先に触れた《鳥渡るこきこきこきと確切れば》の句である。苦しい体験から得た鋭敏な聴覚によって、音そのものを感覚的に表現するオノマトペの方法を己れのものとしたのである。《鳥わたる》につづくオノマトペの

句として、

カチカチと義足の歩幅八・一五 (昭22)
へろへろとワントンとするクリスマス (昭24)

の二句が句集『瘡』に収録されている。前の句は敗戦後の一風景を切りとったものだが、傷夷軍人の義足の音を表現した「カチカチ」が眼目であり、「カ」と「チ」の破裂音の持つ固い響きが、その音の主体である軍人の敗残の心を象徴している。終戦日を「八・一五」としたのは、音調をからませたためと自解しているように、「カチカチ」と「ハチイチ、ゴウ」という「チ」の音のくり返しによるリズムが全体のトーンを緊密にしている。鋭い言語感覚による言葉の斡旋だが、いささかねらいが見えすぎている感もある。

後の句は、当時、軽薄なほどに華やかだったクリスマスと、庶民的で安価なワントンとの思いがけない取り合わせが、「へろへろ」によって生きている。ワントンをすすする時

の感触と音を写して、薄っぺらで頼りなく、なんとなくしつくりしない感覚が表現されている。クリスマスにワントンをすすすることの違和感、一種の自虐めいた心情、それが「へろへろ」なのである。前の句が実音に近いオノマトペであるのに対して、これは、きわめて感覚的、心情的であり、はっとさせられる。

これ以前のオノマトペの句はごくわずかである。

落葉落葉 つんつん 吹かれ地階の灯 (昭11)
青果散り日覆からからと商区寛む (『街』)
これが母の前歯かシンと掌に寒き (『街』)

「シン」という言葉は感覚的だが、「つんつん」や「からから」は、一般的な言葉の用い方で情景の説明にとどまり、先の二句とはやや差がある。オノマトペが生きるか死ぬかは、類想から隔絶した新しい言葉の発見にかかっている。作者の

感性に磨き抜かれたギリギリの表現でなくてはならない。

四

その後、不死男のオノマトペはさまざまな姿を展開する。
退る金魚さらさらと置く首飾り (昭26)

金魚はランチュウ、首飾りは真珠、外出から帰ってきたばかりの婦人、というお膳立てで鑑賞してもらいたい、と自解にいう。さらびやかなパーティから帰宅した婦人が余韻にひたりながら大粒の真珠の首飾りをはずして、さらさらと卓上に置くと、突然置かれた真珠におどろいたランチュウがゆらゆら後ずさりをするという図になる。「さらさら」が真珠の白い輝きとマッチし、婦人の絹づれの音をも連想させて、一時期の華麗なフランス映画の一場面を思わせる。庄中健吉氏が「ダンディ不死男をそのまま出した一句」といっているが、

韻文精神徹底——新人歓迎

月刊 泉

主宰 綾部仁喜

誌代 (送料共)
半年 4800円
一年 8000円
見本誌 400円
(切手可)

〒192 八王子市中野山王1-24
電話天(三)六六一
泉発行所
振替東京1-1545205

鶴

主宰 星野麥丘人

新入会員歓迎
誌代(送料共)

半年 6,000円
一年 10,000円
見本誌 500円(切手可)

お申込みは
〒177 東京都練馬区
高野台4-9-11

鶴発行所
振替・東京 8-137774
電話・03-3997-0056

真珠と金魚の取り合わせがおしゃれである。

菌生ゆげほんげほんと犬の咳 (昭29)

この「菌」は松茸とか椎茸とか食用のキノコではあるまい。うす気味悪い毒茸が想像され、月夜茸のようなものが浮かんでくる。夜になって野山を徘徊する犬がキノコの胞子にむせて咳をしたのである。どこか陰湿で無気味なムードは「げほんげはん」という擬音効果によっている。「菌」は普通の草木と違って得体のしれない不思議な植物であり、それに合う「げほんげはん」である。ありふれた光景が的確な言葉の組み立てにより、幻想的な世界に仕立てあげられている。

恋猫のどろどろの声に家かこまる (昭31)

恋猫の声を「どろどろ」というのはすごい。朔太郎の猫が「おわあ」「おぎやあ」「おわああ」(猫「月に吠える」)と鳴

くのを超えている。もちろん実写音ではない。恋猫のどろどろした情念を感覚的象徴的にあらわし、更には、恋を求めているうつき廻り、どろどろに汚れた姿も暗示している。ふつうは猫の形の容には用いない言葉を新しく意味づけて使い、恋猫の本質に迫っている。同じく猫を詠んだ、

ひらひらと猫が乳呑む厄日かな (昭37)

は、猫の舌を「ひらひら」ととらえて、その姿態を描いている。これもいままでにない斬新な感覚である。厄日の不安な落ち着かない気持ちとびつたりあっている。

寒卵コツと割る聖女学院 (昭30)

聖女学院は、わが国最初の女学院でミッション・スクールのフェリス女学院である。この近くで不死男は幼年時代を過ごし、青年時代にもその付近の居留地をよく歩いたという。

〈寒卵〉という席題によって作られた句だが、「コツ」はいかに寒卵らしく、清楚でかつ厳格な聖女学院にひびきあう音である。

弱引のコツと翁の鯨ならむ (昭48)

この「コツ」は、ハゼの魚信である。音ではなく釣師の手ごたえである。平畑静塔氏は「俳句研究」(昭49・4)の不死男特集で「弱引の賛」と題して、「弱引である。鯨と同一化してこそ始めて使える言葉であろう。三十何年たつてやっとコツと弱引きをして目の餌を探れるようになった」「魚人一体の境地」が展開されていると鑑賞している。かすかな引きではあるが、「コツ」という音感に明快であり、「弱引」と謙遜しながらもコツコツと歩んできた自信を感じさせられる。このオノマトペは不死男のこころの声ということができ。先の〈寒卵〉も胸の中で聞こえた音であり、「コツ」は

不死男の詩情の扉をかすかながらも強くたたき音だった。

ライターの火のポポポポと滝涸るる (昭33)
ここここ羽抜鶏二羽ここここ (昭43)
ととととと蟹の眼洗ふ秋の波 (昭44)

「ポポポポ」は、油の切れたオイルライターからとぎれとぎれに出る火を、聴覚と視覚によってとらえたもので、はかない火の最後の輝きを感じられる。その火にとぎれつつ流れ落ちる涸れ滝を取り合わせて、人間と滝との一体感を生みだし、寂寥とした世界を構成している。同様な表現として「ここここ」は、うらぶれた羽抜鶏のかなしさが伝わってくるし、「ととととと」は、いかにも蟹のグルッとした眼を洗う秋の波打ちぎわのようすが活写されている。それぞれ「ポ」「こ」「と」という音の情感の違いを巧みに使い分けており、音感の冴えが感じられる。

伝統の俳句を21世紀に伝承する

新会員募集

月刊
俳誌

風道

主宰 松本澄江

初心者歓迎します

(見本誌切手500円)

定価900円 (送料とも)

半年5,400円 1年10,800円

〒150 東京都渋谷区
南平台町13-4-707

風の道発行所

電話 03・3464・8030
振替・東京9-101167

蛇笏忌やどすんと落ちて峽の柿 (昭41)

不死男は、早くから飯田蛇笏の「重厚勁烈な作風」に惹かれていた。自解によれば、その忌日に天竜下りに行ったとき山道で青柿が落ちた。小さくせに「どすん」と聞こえたのは、峽中の静けさのためであったが、蛇笏忌という特別な日であったゆえに、彼の作風を暗示する音に聞こえたという。「どすん」は思いきったオノマトペだが、一句のなかで浮き上がっていない。心情を表現するための言葉を探し出そうとする姿勢が消え、素直に自然の音を聞き取って自分の心と重ねあわせている。オノマトペのひとつの到達点であり、〈実相観入〉の境地といえよう。

ビヤ樽に台風前の雨ぎつしり (昭25)
すいすいと電線よろこび野へ蝌蚪へ (昭28)
晩節やポツと藻の咲く硝子鉢 (昭34)
ちらちらと箸ばさむ河豚山眠る (昭39)
葱すいと割いて庖丁始めかな (昭40)
にんまりと蜂は死ぬべし雪催 (昭43)
口中へ涙こつんと冷やかに (昭46)

「ぎつしり」は、作者の獄の体験に裏打ちされた「妙に暗いところに監禁された雨」という自解のように、身動きできないほど詰まっている一粒一粒の雨を感じさせ、台風前という設定が切迫感や不安を表している。「すいすい」は、電柱

石昌子編

定価二万円

〈本体一九四七円〉
送料小社負担

杉田久女遺墨〔続〕

女流俳句草創期に輝かしい足跡を残した天才久女の直筆全句稿を初公開 大型B4判 編者署名入

△カラー▽短冊六・色紙二・見返し絵二・ハンカチーフ手描き一点・手芸品二・帯二・「花衣」表紙一点・久女の夫宇内自画像二・宇内画／福澤諭吉像一点
△モノクロ▽短冊八・色紙三・半切二・掛軸一点・团扇二・スケッチ九・巻紙句稿他二三〇点・久女ノート雑記一四・書簡二六・久女アルバム一二・華道の雑誌一点・書道の手本一四・久女と両親の活花九・大正時代的小倉中学他五・横光利一書及び神崎縹々の書簡他四・杉田家資料四二

△編者のことば：初版『杉田久女句集』の高濱虚子先生序文の中に「送って来たその遺稿といふのを見ると、全く句集の体を為さない、只乱雑に書き散らしたものであった」とあるが、私は虚子先生に久女直筆の遺稿をお目にかけたことは一度もない。私の手で清書したものを先生にお送りしているのである▽

*書店には出ませんので直接ハガキでお申込み下さい。振替用紙をお送りします。又は郵便局の振替用紙でお申込み下さい。
*振替東京4123916

〒三〇六〇一 茨城県猿島郡三和町尾崎三五一九一五
株式会社 東門書屋

拷問によって惨殺された小林多喜二の忌日と、糸でくぐられたハムの取り合わせが鮮烈である。「きりぎり」はハムの質量感と弾力を表しながら、同時に拷問のすさまじさを伝え、その底には多喜二を殺したもののへの憎しみがある。しかし句のかたちには現れているのはあくまでもハムであり、思想が生なかつたや観念的なかたちで表現されるのではなくて「へもの」で裏付けられている。「へもの」を感覚で把握して象徴の域にまで高めているのである。

昭和二十九年九月号の「俳句」に掲載された不死男の「俳句と『もの』」は、俳句は「事」を述べるのではなくて「へもの」を把握せよという主張であり、のちに俳句の叙情はものに即して具象的に形を与える方法によって強く表出できるという「即物具象」を信念とした。この句は昭和三十年の作で、不死男の俳論の実践とみてもよいだろう。不死男は得意のオノマトペという方法によって「へもの」の実体を表現したのである。

と電柱の中間を少ししたるませながらどこまでも続いてゆく電線の様子で、抜き手をきって泳いでゆくような楽しさが、野へ蝌蚪へという童心に結びついている。「ポツ」は、白い藻の花が可憐に咲く姿を表しながら、灯がともるような明るさを暗示して晩節の言葉をやさしく受けとめている。「ちらちら」は、フグの透きとおるような刺身のすがた。「すい」は、見事な包丁さばきで真っ白な葱をさく爽快さを表して、新年の事始めの引きしまった気分をつたえる。「にんまり」は、己れの生をまっとうして死ぬ姿の在りようを冬蜂の姿に象徴している。「こつん」は、固い涙の粒がそのまま胸のなかにあって、泣くことによって癒されない心を暗示している。いずれもこれらの擬態語は、擬声語にくらべると音感がさらに象徴的であり、作者の感性がより強く働いていることがわかる。

多喜二忌や糸きりきりとハムの腕 (昭30)

糸瓜

主宰 篠崎圭介

791 松山市山越4の4の25
糸瓜発行所

TEL 0899(24)2010
振替 徳島1の14619
誌代 年間9,000円(送料共)

不死男の句風は時期によっていちじるしく変わっている。

リアリズム俳句から出発して、階級性の強調、花鳥諷詠の批判、連作俳句や無季俳句の実践などを通して散文的詩精神とリアリズムを提唱し、その後、人間性を重視して、俳句は境界の詩であると主張。戦後になって俳句もの説を唱え、やがてものへの一元化からぬけだして俳諧味を消散するようになった。こうした変遷のなかで一貫して主張したのは、俳句を「詩」として把握することであり、短い形式という俳句の特性を生かすためには、単一化を本命とし、感覚的把握、象徴的表現によらねばならないと強調した。

この感覚とか象徴というのは、オノマトペの性質である。オノマトペは、ものの実体を感じて把握するところに生まれるもので、感性によって捉えられた言葉である。その意味で擬態語もしくは擬情語といつてよいだろう。感覚として訴えるものであるから、内に含まれるものが大きくなれば象徴の効果があがってくる。オノマトペは単なる擬声、擬態ではない。それが成功すれば擬態、擬情によって更に象徴という目ざましい機能を発揮するようになる。

時雨空しゆるしゆると瘦瓶鳴り
ゆらゆらと亡母われ呼ぶ罌粟のかげ

(昭52)
(昭52)

昭和五十一年の秋、S字結腸部腫瘍のため入院、手術。人

工叢門をつけて病氣と闘ったが、へねたきりのわがつかみだし銀河の尾」を最後の一句として、五十二年七月に永眠した。掲出句は病床での句である。

前の句は、「しゆるしゆる」を核として「しぐれ」「しびん」という「シ」の頭韻で統一され、モノトーンの情趣をかもしだしている。「春陰や地獄の針の山見えて」とも詠んだ苦しい病床にあつて、もの寂しい気分を表象しているが、ふしぎに悲愴感とは与えられない。それはこの句の背景に、瘦瓶の鳴る音にじっと耳を澄まし、その音を言葉に置き換えようとする非情なまでの俳諧の精神が息づいているためであらう。それがオノマトペという表現方法から感じられる。

「鳥わたる」の句がそうであつたように、オノマトペは作者の語らざるものをも語つてしまふ。ここでは、瘦瓶の音に死の音を聞きつけながら、客観的にその音を詠もうとしている作者のすがたを浮かびあがらせている。読者はオノマトペを媒体として、オノマトペを生みだそうとする作者のきびしい生き方をみつけるのである。

後の句は、連句集「甘露集」の最後に置かれた絶句の直前におさめられている。母の忌日には必ず句を作つて、回向するのが習わしになつていたという不死男にとつて、母の声や面影を「ゆらゆら」という優しい言葉に定着させたのは、その最後の親孝行であつた。死の直前にいたつて、オノマトペはもはや表現方法ではなく、不死男の感覚そのものであり、人間性のすべてであつた。

俳諧は活物なり。時に臨みてその法を背くもまた法とす。

〔俳諧は生き物である。場合によって、その決まりに背くのも、また大きな意味で決まりのうちにはいつている。〕

蕪村の言葉である。山本鶯喬編『俳題正名』(天明二年刊)のために書かれた蕪村の序文から引く。『俳題正名』は季題に俚語俗用が多いので、それを正して、その正名を挙げるという趣旨の書である。

この前にへはいかいの去り嫌ひのことは、諸書にあらはして、その法をむくべからず。しかれどもとあつて、この部分に続く。〈去り嫌ひ〉は連句において、同語や類縁の語を用いるには何句隔てなければならぬとか、あるいはその面では一度しか用いていけないなどという規則をいう。たとえば、海と浜は同じ水辺の語だから、三句去り、すなわち三句隔てなければ用いてはならないというようなことである。

諸書にあるそのような決まりには従わなければならない。しかし連句は生き物だから、なかなか規則通りにはいかない。時に

は規則を守ることによって連句の文芸としての生命が奪われてしまい、規則に背くことによって、文芸としての生命が発揚されることがある。連句の規則といえど、それは文芸のためのものだから、その生命を発揚するためであつたら、それに背いてもさしつかえない。俳諧においては、規則に背

俳諧は活物なり

山下 一海

先人の言葉90

くこともまた規則のうちにはいつている。

このあとさらに蕪村はへ付けに疎密あり、句に軽重あり、一巻の緩急、句行の浮沈を相顧みて、あるいは表嫌ふものを七句に免じ、字去りのものを五句に禁ずることあり」と書いている。連句を付け進めるぐあいによって、規則を緩和してもいっこう

にかまわないというのである。

これらはもっぱら連句についていつているわけだが、といつてこの『俳題正名』に連句の法式が記してあるわけではないし、去り嫌ひのことが書いてあるわけではない。蕪村は規則にとらわれるなどということの例として、書物の内容とは関係のない去り嫌ひのことを取り上げている。要するに作品は生き物であるというのである。

かつて俳諧をたしなむとは、発句(俳句)を作り、連句を行うことであつた。今は俳句は作つても、連句は作らないという人が多い。連句においては、複数の人々との協調、あるいは競合によって成った作品が、一人歩きはじめようとするスリルを味わうことができた。ところが連句が一般のものでなくなつて、俳句が生き物であるという意識もやや薄らいだのではなからうか。

俳句に關しても、規則や習わしよりも、生き物としての作品を生かすことのほうが大切であることはいうまでもない。季題に關して、定型に關して、あるいは切字に關して、種々の問題を考えるにしても、つねに俳句が生き物であるということを忘れてはならない。